



第 53 号
平成30年3月1日 発行
発行 埼玉県立がんセンター
発行責任者
病院長
坂本 裕彦

基本“唯惜命”
理念

私達は生命の尊厳と倫理を重んじ、先進の医療と博愛・奉仕の精神によって、がんで苦しむことのない世界をめざします。

目次

- 皮膚科の紹介.....1
- 緩和ケアセンターの紹介.....2
- 検査技術部の紹介.....3
- がんの精密医療へ向けた変異遺伝子の機能解析／がんの集いを開催しました.....4



埼玉県のマスコット コバトン

皮膚科の紹介

皮膚科 科長兼部長 石川 雅士



当院の皮膚科について紹介します。2名の医師で診療にあたっております。皮膚の病気は身近な存在であります。

当院はがん専門病院であるため、一般の皮膚科と異なった診療をしています。まずは皮膚がん治療です。年々高齢化に伴い皮膚がんは増えてきており、ほくろのがんと言われる悪性黒色腫（図1）や、紫外線と密接な関係のある日光角化症、有棘細胞癌、基底細胞癌、高齢者の陰部にみられる乳房外パジェット病など多彩な疾患を診断、治療しております。診断

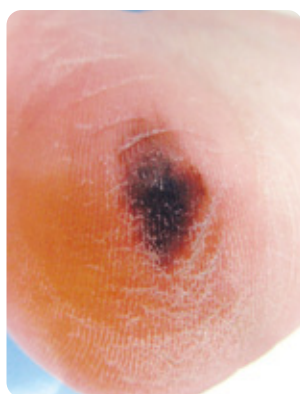


図1 悪性黒色腫



図2 ダーモスコープ

に際してはダーモスコープ（図2）と呼ばれる拡大鏡を用いて疾患の形態を詳細に観察して行っております（図3）。最終的な判断としては生検といわれる組織の一部をとる処置をします。取った組織は病理検査に提出し確定診断

を行います。治療は手術が第一選択になることが多いです。手術以外の方法としては放射線治療や状況によっては抗がん剤治療を行います。手術は安全範囲を十分確保してとる拡大切除術、切除後の欠損に対する植皮術や局所皮弁作成術などの再建術を行っています。病気の性質や患者さんの状態を考慮した切除方法を常に考えております。外来手術も積極的に行っています。また、オプジーボをはじめとする新規抗がん剤が悪性黒色腫から使われ始めており、当科でも使用する機会が増えてきております。



図3 悪性黒色腫のダーモスコープ像

続いて様々な診療科で抗がん剤の治療を行った際にみられた皮膚の副作用（有害事象）に対する治療を行っております。抗がん剤によっては、ほとんどの方で皮膚に何らかの症状がでることもあり、治療の継続には皮膚症状と上手に付き合っていく必要があります。当科では今まで多くの抗がん剤による皮膚の副作用を治療しており、その経験をいかして抗がん剤の治療が継続できるように努めております。他には当院の皮膚排泄ケア認定看護師を中心とする褥瘡対策委員会を通して、入院中の患者さんの褥瘡（床ずれ）予防の活動、治療を行っております。

このように当科は皮膚がん治療にとどまらず、他の診療科での抗がん剤治療をはじめとするがん治療ができるようサポートしております。

緩和ケアセンターの紹介



緩和ケアセンター ジェネラルマネージャー
中山 幸子

緩和ケアセンター
ジェネラルマネージャー

中山 幸子

こんにちは、緩和ケアセンターです。緩和ケアセンターは、「入院」「外来」「在宅」いつでも・どこでも緩和ケア

がうけられる体制を整えるため、平成27年に設置されました。「緩和ケア」とは、

病気による体や心のつらさを和らげ、より豊かな生活が送れるよう支えていくことです。また「がん」と診断された時からの緩和ケア」といわれるように、緩和ケアは手術や抗がん剤、放射線治療と並行して、いつでも受けることができます。



緩和ケアセンター紹介図

主治医をはじめ、多くの職種と協力しながら、体や心のつらさを速やかに和らげるお手伝いをしています。また、緩和ケア病棟への入院の橋渡しも行っています。

緩和ケア病棟は、入院による緩和ケアが必要となった患者さん、ご家族にご利用いただく病棟です。専門の医師や看護師、薬剤師、MSW（医療ソーシャルワーカー）やPT（理学療法士）、栄養士、ボランティアなどが、患者さんやご家族の希望に応じたケアを提供しています。また、ご家族との時間を大切にできるよう全室個室で、ゆったりと過

ごせる環境を整えています。

ご自宅で生活される患者さんやご家族には、安心して療養生活が送れるよう、相談支援センターを通じ、地域の往診医や訪問看護師と連携を図っています。緩和ケアセンターが中心となって開催しているカンファレンスでは、地域の医療機関とのネットワークを広げ、在宅で生活される患者さん、ご家族の支援に繋がっています。

緩和ケアセンターは、緩和ケアをより多くの方に知っていただくため、毎年10月に「緩和ケア週間



イベント」を開催しています。医療者からのお話やパネルの展示、よろず相談、緩和ケア病棟見学ツアーなどを行い、多くの患者さんやご家族にご参加いただいています。さらに月に1回程度「患者・家族対象セミナー（緩和ケア編）」を開催し、がんによって起こる様々な症状についてお話をしています。予約制ではないので、お気軽に足を運んでみてください。

「緩和ケアについてもっと知りたい」「緩和ケアを受けたい」と思ったら、遠慮なく医師や看護師にお声がけください。緩和ケアセンターはこれからも、より多くの方が適切な時期に適切な緩和ケアを受けられるよう、頑張っています。



私たちが緩和ケアチームです

検査技術部の紹介

● 検体系検査室

検査技術部 技師 高田 梨恵

検体検査についてご紹介します。検体検査室は外来採血室のすぐ奥にあります。そのため採血後すぐ検査室に検体が届き検査をすることができます。また、検体検査はいくつかの部門に分けられます。今回はその中でも当センターの検査室の特徴的な部分についてお話します。1つ目は腫瘍マーカーです。当センターは埼玉県内で最も多くの種類の腫瘍マーカーを院内測定しています。そのため多くの腫瘍マーカーは診察前に結果がわかります。2つ目は血液腫瘍を中心とした特殊な検査です。骨髄液の染色と観察や、血液腫瘍細胞を検査し、白血病や悪性リンパ腫など血液疾患のタイプを診断し、治療効果の判定をしています。その他に生化学、一般、細菌、輸血検査などの部門が存在しています。各部門「すべては患者さんのために」



という理念のもとで迅速に、正確な検査結果を今後も提供できるよう常にベストを尽くしてまいります。

● 生理検査室

検査技術部 主任 益子 明子

生理検査では超音波検査、心電図検査、肺機能検査、ピロリ検査などの一般的な検査の他、超音波ガイド下にて頭頸部領域や乳腺領域などの組織診や細胞診、肝臓のラジオ波焼灼術(RFA)、経皮的エタノール注入療法(PEIT)なども行っています。ラジオ波焼灼術とは身体の外から特殊な針をがん組織に直接刺してラジオ波という電磁波を流し

その熱によってがんを焼いて死滅させます。経皮的エタノール注入療法とは特殊な針をがん組織に直接刺して純度100%エタノールを注入し、がん細胞を死滅させます。いず



れも超音波で正確な位置を確認しながら行いますが、事前に医師と目的とする病変の位置や大きさ、穿刺方向を確認し、医師・検査技師・看護師が一つのチームとなり、患者様の安全を第一に行われております。生理検査一同、今後も様々な検査要望に応えていけるよう精進してまいります。

● 採血室

検査技術部 副技師長 岡野 博信

外来採血室について紹介します。外来採血室は2階エスカレーターとエレベーターの間に位置する24番検査総合受付の左奥にあります。採血ブースは7席で検査技術部と看護部とで共同で受け持っています。最新の患者認証システムを導入しており患者誤認、採血管の取り違えは皆無です。また患者待合室は広い作りと大きな患者呼び出しモニターが特徴です。採血数は1日平均300～500件行っています。年々検査の多様化と採血数の増加により待ち時間が長くなっています。特に午前中は火曜日を筆頭に皆さまに長い待ち時間を要していただいています。採血室では患者さんのために何ができるか?採血に対する不安をどうすれば無くせるか?確実に採血するにはどうすればよいか?待ち時間をいかに減らせるか?職員全員で日々考え技術の向上や効率性を高めています。外来採血は朝8時から



始まります。午前中は混雑することが多いため待ち時間が長くなりますので、みなさん余裕をもっていらしてください。

がんの精密医療へ向けた 変異遺伝子の機能解析



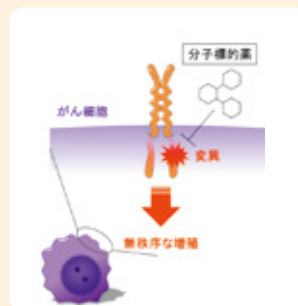
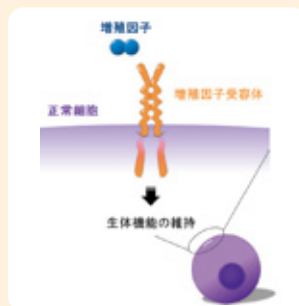
臨床腫瘍研究所 技師
佐藤 俊平

臨床腫瘍研究所 技師 佐藤 俊平

ゲノム解読技術の進歩と分子標的薬の開発により、近年様々ながん種において特定の変異遺伝子を標的とする精密医療（プレジジョン・メディシン）が導入されつつあり、治療成績の向上をもたらしています。しかし、症例数の少ないがん種では遺伝子変異の解析が進んでおらず、依然として分子標的薬の導入が遅れています。

私はがんにおける増殖因子受容体の機能と分子標的薬の応用に焦点を当て、研究を行っています。増殖因子受容体は細胞膜貫通型の分子であり、この受容体に増殖因子が結合することによって細胞の挙動を制御するシグナルを発信します。

本来このシグナルは正常な生体機能の維持に必要なものですが、がん細胞ではしばしばこの受容体の遺伝子に変異が生じることで過剰な増殖シグナルが伝達され、細胞の無秩序な増殖が引き起こされます。網羅的なゲノム解析から、私たちはがんにおける増殖因子受容体の新規の遺伝子変異を同定しました。現在はこの変異と発がんや悪性化の関連について検証している段階であり、その後、この受容体に対する分子標的薬の有効性を評価する予定です。臨床応用への道は長く険しいとは思いますが、将来的にはこの研究結果ががんの精密医療へ繋がることを期待して、日々研究に取り組んでいます。



第42回

埼玉県民のための “がんの集い” を開催しました

平成30年1月20日（土）に、「第42回 埼玉県民のための“がんの集い”」をさいたま市のソニックシティ国際会議室において開催しました。

今年度は、「みんなで創る、がん医療」を総合テーマとし、実際にがんを体験した方々や、ボランティアの方、当センターと連携していただいている地域医療機関の方、がんセンター職員

等から「がん医療」に関して、様々な切り口でお話しをしていただきました。

当日は、約140名の皆様が来場し、最後まで熱心に耳を傾けていました。来場者からは、特にがん体験者のお話しについて「心に響いた。前向きに頑張っている姿を見て元気づけられた」「勇気を持って治療を受けることができると思った」等、多数の御感想をいただいた他、がんセンターを紹介する映像資料については、「がんセンターの1日が理解でき、何回も確認後に医療行為がなされ、改めてスタッフの大変さに頭が下がる思いです」との御感想をいただきました。

今年度の「がんの集い」も、県民の皆様にごがん医療の実情について、多面的な視点でお伝えし、情報を共有できる貴重な場であることを改めて確認することができ、実りあるものとなりました。

（がんの集い実行委員会）



第42回 埼玉県民のための“がんの集い”

みんなで創る、がん医療

1月20日(土) 13:00~18:00

ソニックシティ国際会議室(10~14F)

入場無料

予約受付 12/11~12/17

予約電話 048-833-1111

予約URL <http://www.saitama-cancer-center.jp/event/>

第42回 埼玉県民のための“がんの集い”

みんなで創る、がん医療

- 1 患者が語るトピック
がんを体験した方々から、お話しを伺います。
【1】がん体験者
病状悪化や再発を心配しながら日々生活している方々から、がんを体験していただく。がんを体験していただく。がんを体験していただく。
【2】がん医療関係者
病状悪化や再発を心配しながら日々生活している方々から、がんを体験していただく。がんを体験していただく。がんを体験していただく。
【3】がん医療関係者
病状悪化や再発を心配しながら日々生活している方々から、がんを体験していただく。がんを体験していただく。がんを体験していただく。
- 2 ボランティアが語るトピック
「がんを体験した方々」の病状悪化や再発を心配しながら日々生活している方々から、がんを体験していただく。がんを体験していただく。がんを体験していただく。
- 3 地域の医療機関が語るトピック
「がんを体験した方々」の病状悪化や再発を心配しながら日々生活している方々から、がんを体験していただく。がんを体験していただく。がんを体験していただく。
- 4 医療を創るトピック
がんを体験した方々から、お話しを伺います。病状悪化や再発を心配しながら日々生活している方々から、がんを体験していただく。がんを体験していただく。がんを体験していただく。